



Title	奥山史亮『エリアーデの思想と亡命 クリアーナとの関係において』（北海道大学出版会、二〇一二年）
Author(s)	辻, 隆太郎
Citation	基督教學, 48, 41-45
Issue Date	2013-07-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/62408">http://hdl.handle.net/2115/62408</a>
Type	other
File Information	05tsuji .pdf



[Instructions for use](#)

奥山史亮

『エリアアーデの思想と亡命  
クリアーヌとの関係において』  
(北海道大学出版会、二〇一二年)

辻 隆太郎

周知のように、学問としての「宗教学」とそれが依拠する「宗教」という概念は、今日厳しい批判に晒されている。それらの概念が不可避的に帯びている西洋中心主義や本質主義、「宗教」現象を特定の政治的・歴史的文脈から遊離させ漂白し、そのイデオロギー性あるいは眼差しの偏向にも関わらず偽装される「宗教学」言説の透明性や超越性、宗教学それ自体が自らの超越的視座を信奉する宗教的営為となってしまうことなど。エリアアーデは、こうした宗教概念論の典型的な批判対象のひ

とつである。それを踏まえたくうえで、エリアアーデ宗教学ではなくエリアアーデ思想を、彼の亡命者としての在り方との関係から再評価しようというのが、本書『エリアアーデの思想と亡命』である。

本書はエリアアーデがルーマニア人亡命者組織の機関誌に掲載した論説、ルーマニアに残した家族や同郷の亡命者たちと交わした書簡、ポルトガル滞在期間の『ポルトガル日記』など、既存のエリアアーデ研究ではあまり顧みられることのなかったルーマニア語文献を資料として用い、「亡命者としてのエリアアーデ」という視点から、彼の宗教学論や文学作品の位置付けの再考を試みている。本書は三部構成になっており、章立てはそれぞれ以下の通り。

- 第I部 亡命者エリアアーデの思想活動とエリアアーデ宗教学／第一章 ポルトガル滞在期におけるエリアアーデの思想形成／第二章 ルーマニアに対するエリアアーデの罪責意識と宗教学論の形成／第三章 亡命者エリアアーデの思想におけるエリアアーデ宗教学

第Ⅱ部 亡命者エリアーデの思想活動とエリアーデ文学／第四章 エリアーデ文学をめぐるエリアーデとクリアーヌの対話／第五章 エリアーデ文学における「精神」概念に関する考察

第Ⅲ部 エリアーデとクリアーヌの関係／第六章 鉄衛団運動をめぐるエリアーデ批判とクリアーヌ／第七章 ルーマニア社会主義政権との闘争におけるエリアーデとクリアーヌ／第八章 クリアーヌからみたエリアーデ宗教学批判の再考

第Ⅰ部ではエリアーデの宗教学理論と亡命者としての思索との関係を問い、彼の学問的営為は社会主義政権に対するエリアーデの危機感、祖国に残した人々への亡命者としての罪責意識に突き動かされた、という解釈を提示する。第一章ではルーマニアの政情に対するエリアーデの恐怖感・危機感と、理不尽に不可避的に襲い来る苦難や悲劇Ⅱ「歴史の恐怖」についての思索とが重なり合うさまを読み解く。苦難を秩序化する神話機能が衰退した

今日において、「歴史の恐怖」に抗う術をどこに見出すかの回答が、『宗教学概論』『永遠回帰の神話』における聖なるものの「残存」という概念である。第二章ではルーマニアのフォークロアにエリアーデが見出した、死を宇宙的秩序の中に再統合される契機と見なし喜びをもつて受容するルーマニア民族の「精神」概念を取り上げ、従来は鉄衛団運動との関連においてのみ議論されがちであったそれを異なる角度から検証し、ルーマニア亡命者組織の機関誌に掲載された言説から、政治的経済的対立を抱えるルーマニア人亡命者間で共有可能な文化価値として、「精神」の概念が用いられていることを指摘している。第三章では亡命者組織機関誌での言説から、亡命者が偏狭な民族主義運動に陥る危険性に対処するため「宇宙的キリスト教」「遊牧民的宗教」概念が用いられていたことを示し、エリアーデ宗教学の普遍性志向と亡命者たちをより広い文化領域に組み入れる意図との関係を指摘する。

第Ⅱ部では、エリアーデの文学作品と、彼の亡命者としての思想活動との強い結びつきを検証している。彼の

文学はルーマニア人を第一の読み手として想定しており、亡命者との関係性において読み解く必要性が強調される。第四章ではエリアーデとクリアーヌの往復書簡の読解を、第五章では戦前と戦後の「精神」概念の用例比較をそれぞれ中心に、戦後のエリアーデ作品を「亡命者が歴史的現実に対抗するための領域を開示する」「現代世界の神話」(一三八)を意図したものとして、また社会主義政権の統制下にある人びとに代わってルーマニアの文化・精神を示し後世に遺す文化活動と解釈する。

第三部ではエリアーデとその弟子クリアーヌとの関係を再検証し、両者の思想の異同が示される。第六章では鉄衛団問題について語ることを忌避するエリアーデに対し、彼の政治的姿勢についてクリアーヌが何度となく説明を求めていたことを確認している。第七章では両者の亡命者としての政治的姿勢、および宗教理論への反映が検証される。エリアーデは民族の連帯と存続、亡命者間の見解の相違を捨象し一般化することに、クリアーヌは圧力に屈せず亡命者の苦難について積極的に発言すること、独裁政権による知や情報の操作への抵抗に力点を置

いた。それは普遍主義的・本質主義的なエリアーデの理論と、宗教現象を人間のすべての思考パターンを包摂する「システム」から派生した断片と見なして共時的に考察しようというクリアーヌの理論に反映されている。第八章では、ルーマニアにおけるエリアーデ・クリアーヌ研究の動向を紹介しつつ、クリアーヌがエリアーデ思想の超克を試みていたことが示される。

本書は宗教概念論のエリアーデ批判への反駁ではなく、彼の思想の政治性に対する異なる視点からの解釈を示し、包括的なエリアーデ理解の可能性を開く試みであると言えるだろう。ラッセル・マッカチオンは、非還元主義的「宗教」概念は、特定の文化現象を歴史的・政治的文脈から切り離して特権的地位を与え、「宗教学者」の立場も特権化すると批判し、「宗教」をそれぞれのコンテキストのなかに戻して再分析する必要性を強調した。そしてエリアーデ理論の政治性について、鉄衛団運動の反近代的・反ユダヤ主義的・ルーマニア民族至上主義的言論の敷衍に資した、と批判している。著者は学術理論としてのエリアーデ批判の妥当性は認めつつ、エリ

アーデの政治性に対するマッカチオンの批判を拙劣なものとして再批判する。著者によれば、マッカチオンは自身が重視する必要性を訴えた歴史的・政治的位置を顧みることなく、エリアーデの政治性を鉄衛団に短絡的に結び付けている。本書はエリアーデの「宗教」概念を、宗教概念論による批判がそこから切り離していたエリアーデ自身の歴史的・政治的コンテキストに戻し、その中で果たした役割を考察したものと評価できる。

そのうえでやはり気になるのは、本書で示された解釈と、エリアーデ宗教学の学術理論として妥当性あるいは評価が、どのように関係するのか、影響するののかということである。エリアーデの理論そのものの妥当性を検討することが本書の趣旨ではないことは明言されている以上これはないものねだりなのだろうが、この点が語られない以上、エリアーデ宗教学の今日的意義は、やはり不鮮明であるように思われる。いささかナイーブ過ぎる認識かもしれないが、理論そのものの妥当性を評価するのに、それが生み出された背景がどれほど重要なのだろうか、との思いは拭えないのである。本書が解明した事柄

と彼の学術理論の妥当性についての批判が無関係なのであれば、彼の亡命者としての思索から人物伝として学ぶことはあるが、彼の学術理論の再評価にはつながらないだろう。著者の言うように、エリアーデが理論上の差異の軽視や一般化を、(亡命者組織においては、という留保があるとはいえ) 政治的效果を意識しながら確信的に行なったのであれば、それは政治的主張の学術理論への偽装という、宗教概念論が批判するまさに典型例であるとも取れる。いずれにせよ、本書で開かれた視座からエリアーデ宗教学それ自体をどう再評価するかという問題は、避けて通れる問題ではないだろう。

また鉄衛団問題に直結して語られがちなエリアーデの政治的姿勢について、別の解釈可能性が提示されたことは重要な意義を持つものではあるが、エリアーデと鉄衛団周辺の関係それ自体に関しては、本書の記述は既知の事実を再確認したに過ぎなかった、という印象を覚える。著者はエリアーデのファシズム・反ユダヤ主義・民族主義的傾向への接近についての最終的な判断を保留しているが、それらの批判の端緒となった『トラドート』

論文の信ぴょう性の低さという点を別にすれば、本書の知見はエリアードに対するこの点での断罪に対しては無力だろう。この問題に関しては鉄衛団自体の研究の深化の必要性や資料上の困難もあるだろうが、一層の進展を期待したい。

書  
評

辻隆太郎著

『世界の陰謀論を読み解く』

―ユダヤ・フリーメイソン・

イルミナティ―』

(講談社新書、二〇一二年)

奥山史亮

本書は、二〇一二年二月の刊行以来、複数のマスメディアで取りあげられ、再版するほどの売れ行きをみせている。陰謀論という、身近に存在するがまとまったかたちで研究対象とされにくい現象を取りあげている主題の面白さが人気の理由であろう。本書は、研究者が利用するための学術書ではなく新書であるため、数多くの一般読者の手に行き渡り陰謀論に関する情報を広めることを目的としている。したがって、陰謀論に関して調査した